

サービ斯拉ーニングで学んだこと

社会福祉学部 社会福祉学科 2年 徳嶺 夏海

活動先：NPO 法人 共育ネットはんだ

ゼミ：野尻 紀恵 先生

私が活動先に共育ネットはんだを選んだ理由は、2年生になる前に行ったバスツアーで共育ネットはんだに行き代表者の方の話を聞いておもしろそうだったからだ。共育ネットはんだは障害児を対象に活動しておりそこで8日間の活動を行ってきた。初めて活動に参加したときはすごく緊張もしたし、どのように子どもたちと関わっていいのかわからずうまくコミュニケーションをとることもできないことが多くあった。私が担当した女の子は、意思疎通がうまくできず私が話したことに対して聞いて行動してくれるが、その子からの返事は返ってこない。私が一方的に話をするだけである。しかし、活動回数を重ねていくとその子がいま何をしたいのかがだんだんわかるようになってきて、私自身が最初の頃に比べると心に余裕ができてしっかり周りの子どもも見ることができるようになった。共育ネットはんだでは、自閉症の子やアスペルガー症候群の子などとさまざまな障害を持った子どもたちが活動している。同じ障害名でも、一人一人の症状やこだわりを持っている部分は、その子自身をしっかり見ていかないとわからない。このサービ斯拉ーニングの活動を通してまず私自身が周りをしっかり見るということができるようになった。これまで、障害に対して少しでも偏見の目で見ることがあった。だから今回の活動先に障害児を対象にしているNPOに行った。少しでも障害というのに対して偏見の目でみてしまった自分が嫌だったからだ。障害というものを何もわからうとせずにいる自分が恥ずかしいと今では思う。障害を持っていても同じ人間であり障害を持っていない人と同じくらいの欲求なども持っている。ただ、それをうまく表現できないだけである。それをうまく表現できるようにサポートしていく力が必要なのではないかと私は思った。

一方、サービ斯拉ーニングを通して私は、「伝える」ことのむずかしさを痛感した。私のグループでは学生企画に親子でミニ運動会をすることに決めた。そこでエアロビクスをはじめ、借り物競争、綱引き、玉入れ、フォークダンスの順に流れを決め行った。親子合わせて60名くらいの人数を4人で動かしていくというのは難しいだろうとは思っていたが、予想以上に難しく、始まったばかりからパニックになりうまく進行することができず、後悔の残る学生企画であった。進行は、子どもや親を誘導しながら行う。親には伝わっているかもしれないが子どもたちをうまく誘導できない。私たちのサポートをしてくれていた共育ネットはんだの職員たちの力も借りながら進行していった。一番苦戦したのがフォークダンスの説明であった。私たちは、親はフォークダンスを経験しているものだと思います子どもに教えながらできるのではないかと考えていたため、簡単な説明しかせずにフォークダンスの競技に進もうとした。はじめはうまく円になることも、一緒に踊っていた人と次

の人に交代するという動きも、子どもたちには難しく、フォークダンスの動きができずにいた。しかし、何回も何回も練習をしていくうちにだんだんとできるようになり、最後には円になりなんとか踊りきることができた。その時私は、人に物事をうまく「伝える」ということがこんなにも難しいことだということを実感した。障害を持っている子たちには少しの動きであっても難しく、伝える側の言葉次第でパニックになったり、ちゃんと理解して動いてくれたりする。子どもたちのことをしっかりと理解していなければできないことだと思った。一緒に踊っていた人が次の動きでは別の人に代わるということがパニックになり、一人の人としか踊らなかつた子どももいた。その子の場合、円の外で同じ人と進みながら踊ったりするなどその子にあった進め方も考えていかなければならない。学生企画が無事終わるころには大変な疲れを感じたが、同時に子どもたちやその両親から「すごく楽しかった」「ありがとう」などと声をかけてくれたり笑顔をみせてくれたりしたことが今でも忘れることなく頭の中に残っている。このサービスマーケティングの活動を通して人と関わる時に大切である物事を人に「伝える」ということの難しさを学ぶことができたし、周りをよく見て行動するということが自分には身についたと思う。人と密接にかかわっていくという楽しさを知ることができた。そして、障害を持つ子どもの素晴らしさに気づき、将来は障害児施設か障害者施設で働きたいという夢もみつけることができた。

また、このサービスマーケティングでの活動を半田市で行ったが半田市には共育ネットはんだのように障害児などを対象に活動している NPO 法人が少ないということがわかった。半田市には半田養護学校があったり小学校の中には特別支援学級が設けられていたり障害児も多く暮らしている。子どもたちがもっと活動しやすい環境をつくるべきだと私は思う。共育ネットはんだでは、バスケットボールを通して活動できたり食育での活動があったりと幅広く活動を行っている。とくに食育での活動に参加したときに包丁を上手にを使って野菜などを切るのを見て、教えれば包丁なども使えることを学んだ。この食育の活動に参加している子どもたちは、家でも進んで家事を行なったりできているのである。じっくりと教えてもらう場があればできることなのだ。子どもたちが大人になっていくにつれ親の手を借りずに地域で生きていくためにも、自分の身の回りのことができるようにこのような取り組みの場が増えれば良いなと思った。一方で、子どもたちが暮らしやすい社会にしていくためにももっと周りの人たちの理解が必要だと思った。障害というだけで偏見や差別の目で見られることが多々ある。誰もが障害について理解すれば、子どもたちはもっと暮らしやすいと思う。私も少しではあるが障害に対して避けていた部分があった。しかしこの活動を通し障害について知っていくとその私の中にあつた偏見がなくなった。障害を簡単に理解することは難しいと思うが、実際に関わってみるとことが重要なのだ。少しでも多くの人に関わりをもって障害について理解し、差別や偏見がなく、障害を持っている人たちが暮らしやすい社会になっていくことを願いたいと思う。

サービスマーケティングの活動での学びは深く、自分の将来の夢も見つけることができた。自分自身が色々な意味で大きく成長できたと思う。この活動を今後に生かしていきたい。